

月刊

2021

6
月号

みんぱく

特集

音楽の祭日

みんぱくらしい音楽を求めて

出口 正之

和太鼓奏者にとってのみんぱくと
音楽の祭日

神奈川 馬匠

民族楽器の楽しみ方

加藤 敬徳

みんぱくの「動態展示」

柳本 多津之

生きた展示としての音楽の祭日

片山 美貴 伊藤 香里

みんぱくと音楽

福岡 正太

「音楽の祭典」のはじまり

園田 直子



音楽こそメッセージである

ピーター・バラカン

コロナウイルスの影響もあると思いますが、アメリカの音楽業界では二〇二〇年上半期の売り上げの八五パーセントが配信によるものでした。日本はまだそこまで伸びていませんが、時間の問題だと思います。配信の便利さに一度慣れればやめられませんが、音質について否定的なことを言う人もいますが、昔のノイズ混じりのAMラジオにしても、飲食店の客の会話と競わなければならないジュークボックスにしても、ぼくが大学生まで使っていた安物のレコード・プレイヤーにしても、決してオーディオ環境として誇れるものではありませんでした。いい音楽を楽しむ媒体は何でもいいと、個人的には思います。また音楽をアルバムで聴かず、曲単位で消費する傾向があるというのも、昔からのポピュラー音楽の姿です。一九六〇年代の後半以降、ミュージシャンがアルバムを意識して音楽を作るようになったことは確かですし、それによって生まれた名盤が数多くあります。しかし、CDの時代になったから次第にシングル盤が発売されなくなったことがきっかけで、お金のない若者たちが無料で（違法の）ファイル交換をするようになり、それによって音楽業界の流れが決定的に変わってしまったのです。ラジオ番組を生業としているぼくは毎日色々なところから新たな音楽の情報が入ると、インタネッ

トのお陰で瞬時に音を確認することができ、気に入った曲はすぐ放送で共有できるので、番組作りはラジオの仕事が始めた一九八〇年代に比べたらケタ違いに楽になりました。ただ、音源探しのためにレコード店を駆けずり回ったり、レコード会社の人たちと情報交換をしながらかちよつと渋めの面白い新人のことを知ったりした時代に比べると、新しい出会いができたときのありがた味が少し減った気がします。一年ほど前に、久しぶりにラジオ番組でかかった曲に感激した時の嬉しさは今も甦よみがえってきます。元々ラジオ番組を持ちたかったのはやはりそんな出会いの機会を提供したいと思ったからです。ぼくが何十年も聴き続けている愛聴盤でも、ラジオを聴いている人にとって初めて聴く「新曲」かも知れないことを今でも自分に言い聞かせるようになっています。ラジオで聴いたものを気に入ったら今度は配信で繰り返し聴くことも、SNS機能で友だちにそれを拡散することも簡単です。そのようにすればラジオと配信のコラボレーションによって多様な音楽を幅広く紹介することができるとは思います。よくも悪くも出かけることが少なくなった多くの人がラジオを再発見しているのころ、ぜひそれぞれの好きな音楽を積極的に見つけて欲しいです。

プロフィール
1951年ロンドン生まれ。ロンドン大学日本語学を卒業後、1974年に音楽出版社の著作権業務に就くため来日。現在フリーのプロトドキャスターとして活動。バラカン・ビート（イクター MAGNET）、ウィークエンドサンシャイン（ZET EM）、ザ・ライフスタイル・ミュージアム（Tokyo FM）、ジャパノロジー・プラズ（ZET BS）などを担当。ウェブサイトで Peter Barakan dot net に活動を紹介している。

月刊
みんなぱく

6月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文 音楽こそメッセージである ピーター・バラカン</p> <p>特集 音楽の祭日</p> <p>2 みんなぱくらしい音楽を求めて 出口 正之</p> <p>4 和太鼓奏者にとつてのみんなぱくと音楽の祭日 神奈川 馬匠</p> <p>5 民族楽器の楽しみ方 加藤 敬徳</p> <p>6 みんなぱくの「動態展示」 ——民族音楽としてのロックンロール 柳本 多津之</p> <p>7 生きた展示としての音楽の祭日 ——ネパールのサーランギ演奏とみんなぱくの資料 片山 美貴 伊藤 香里</p> <p>8 みんなぱくと音楽 福岡 正太</p> <p>9 「音楽の祭典」のはじまり 園田 直子</p> | <p>10 〇〇してみたい世界のフィールド ゴア調査旅行の思い出 小谷 訓子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界 日本の竹の造形に魅了された世界の人びと 諸山 正則</p> <p>16 みんなぱく回遊 ひょうたんで悪鬼を祓う? 諸 昭喜</p> <p>18 シネ倶楽部 M 里帰りと里離れ ——「8 テールのゴールド」 辺 清音</p> <p>20 ことばの迷い道 信頼してはいないけれど 茶谷 智之</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

特集 音楽の祭日

「音楽の祭日」は、一九八二年にフランスで始まった「音楽の祭典」に端を発する、プロ・アマを問わない音楽家によるライブ・コンサートである。「音楽はすべての人のもの」という精神に則り、入場無料とし、参加協力をえた会場で夏至の日前後におこなうというコンセプトをもつ。

その後、一九八五年に「ヨーロッパ音楽年」に発展したこのイベントはフランス国外にも広がった。日本でも二〇〇二年に開始され、みんぱくでは江口一久教授（一九四二〜二〇〇八年）率いるボランティエグループ「地球おはなし村」が、二〇〇三年に西アフリカの太鼓、ジェンベの演奏をおこなったのが始まりである。

わたしが音楽の祭日のプロジェクトを任されたのは、その翌年、みんぱくが国立大学法人法の施行で法人化した二〇〇四年四月の下旬だった。いろいろと検討を重ねた結果、出演者も公募で募ることにした。当時、音楽の祭日はまったくの無名であり、どのくらいのグループが集まるのか、不安のスタートだった。まして開催は梅雨時。しかし、ありがたいことに二組の音楽家、グループが集まってください、当日は天候にも恵まれ、好評のうちに終了した。

それから毎年、試行錯誤を繰り返しながら、みなさまのお力添えをえて、音楽の祭日はみんぱくの恒例イベントとして定着していった。例年、抽選になるほどの出演申込をいただき、また、開催当日はみんぱくの来館者も特に多い日になっている。

ある年のこと、行事終了後、二階の控室からいろんな出演者が太鼓をたたき、笛を鳴らし、踊り、歌いながら階段を下り、誰もいないエントランスホールを歩き出したことがあった。知る人ぞ知る、「音楽の祭日」の出演者懇親会「の自然発生的なスタートである。この日以降、出演者のなかにも急速に一体感が生まれたように思う。

このイベントで、わたしが驚いたことは、多様な音楽の広がりである。世界各地の楽器をもち寄り、みなが演奏する。演奏ばかりでなく、衣装や演出も

みんぱくらしい音楽を求めて

でぐち まさゆき
出口 正之
民博 名誉教授

音楽の祭日とのかかわり

「音楽の祭日」は、一九八二年にフランスで始まった「音楽の祭典」に端を発する、プロ・アマを問わない音楽家によるライブ・コンサートである。「音楽はすべての人のもの」という精神に則り、入場無料とし、参加協力をえた会場で夏至の日前後におこなうというコンセプトをもつ。

その後、一九八五年に「ヨーロッパ音楽年」に発展したこのイベントはフランス国外にも広がった。日本でも二〇〇二年に開始され、みんぱくでは江口一久教授（一九四二〜二〇〇八年）率いるボランティエグループ「地球おはなし村」が、二〇〇三年に西アフリカの太鼓、ジェンベの演奏をおこなったのが始まりである。



エントランスホールで演奏する「地球おはなし村」音楽隊（2004年）



インドネシアの竹の楽器アングロンなどの美しい音色を奏でるパシール・ビンタン。右端は司会の福岡正太教授（2019年）



カーエケエケを手に歌い踊るハラウ フラ オ マカナアロハ（2013年）

多様な音楽の秘密

それから毎年、試行錯誤を繰り返しながら、みなさまのお力添えをえて、音楽の祭日はみんぱくの恒

本格的である。これほどの広がりはどうして起こるのだろうか。機会があるたびに出演者に聞いて回った。企業等の海外駐在員のご家族が現地の音楽を本格的に習得し、現地で楽器を調達し、それをそのまま日本にもち帰って、その音楽のリーダーとなっていくようなケースがあった。逆に留学生が自国の音楽を日本にもち込み、次第に広がっていったケースもある。さらには西洋音楽の教育を受けた方が、そこから次第に自身の関心を広げたというケースもあった。

みんぱくは世界各地からさまざまな楽器を収集しているが、参加者のなかにはみんぱくで見ることのできない楽器を使うグループもある。現地での楽器の入手の他、インターネットによる調達方法の普及も多様な音楽の広がりにも影響を与えたのだろう。さらには、ハワイの「カーエケエケ」という、竹を材料にした楽器を使ったグループがあったが、入手手段がなかったことから、日本の竹を切り出して自ら

みんぱくの恒例イベント「音楽の祭日 in みんぱく」。六月におこなわれるこのイベントには音楽を愛する方々が各地から集まり、演奏してくださっている。みなで音楽を楽しむこの日、みんぱくは音楽で満たされる。

本特集ではこのイベントを紹介するべく、出演者の方々にそれぞれの活動やみんぱくとのかわりについてご執筆いただいた。企画・運営にたずさわる本館教員による解説も加え、みんぱくの「音楽の祭日」に迫る。

まりである。

わたしが音楽の祭日のプロジェクトを任されたのは、その翌年、みんぱくが国立大学法人法の施行で法人化した二〇〇四年四月の下旬だった。いろいろと検討を重ねた結果、出演者も公募で募ることにした。当時、音楽の祭日はまったくの無名であり、どのくらいのグループが集まるのか、不安のスタートだった。まして開催は梅雨時。しかし、ありがたいことに二組の音楽家、グループが集まってください、当日は天候にも恵まれ、好評のうちに終了した。

作ったという。こうしてさまざまな楽器が毎年、一堂に会しており、出演時には楽器の説明をしてくれる方も少なくない。

みんぱくらしい

出演者は近畿圏にとどまらず、全国各地からご参加くださっている。出演者との交流を通じて、何にもましてありがたく思うのは、みな「みんぱくで演奏すること」の意味を考えながら集まってくださっていることである。音楽の祭日の主役は音楽家であり、みんぱくは場を提供しているにすぎないのだが、出演者の方々のおかげで、わたしは、みんぱくにも磁力があるのではないかと感じることもある。出演者の方から「みんぱくらしい音楽とは何ですか」と聞かれることがあるのだが、それには単一の答えはない。だがわたしは、みんぱくを選んでくださった方々の思いに支えられた音楽が「みんぱくらしい音楽」なのではないかと思っている。



講堂で演奏する豊中エイサー 豊優会（2018年）



アラブの歌謡曲や映画音楽を披露するハサン・サビ（2019年）



鉄琴、電子ドラム、音声合成による歌声などで童謡・唱歌を演奏するロボットバンド（2019年）

和太鼓奏者にとつての みんぱくと音楽の祭日

神奈川馬匠
和太鼓奏者

和太鼓奏者として世界各地で演奏し、また演奏先で和太鼓のワークショップなどを開いているが、以前のわたしは一日中コンピュータの前に座り、エンジニアとして、三角関数などを使って仕事をする生活を送っていた。和太鼓の演奏経験はもとより、音楽を聴くこともなく、ストレス解消で始めた和太鼓だったが、それが次第に自己表現の手段となり、気がつけば職業となっていた。

和太鼓を始めてからはデザインや工芸品等、いわゆる伝統文化に興味湧き、そこで知ったのがみんぱくであった。館内をめぐるうちに国内外の楽器や風習を目的の当りに知ることができ、軽い興奮状態になったのをよく覚えている。ソロ活動を始めてからのコンサートでは映像を使う場面があるが、「木火土金水」という「五行」をテーマにしたときや、制作の段階で行き詰まったときなど、みんぱくに行くと展示物を見ているとイメージが湧き出てきた。

音楽の祭日には二〇〇五年より出演しているが、最近では指導しているいくつかのグループの子どもたちを声をかけて、混成チームを結成して参加することが多い。演奏に際して参加メンバーには「特別な場

所での演奏は練習も特別」と檄を飛ばしているが、いつも活動している地元を飛び出て、自分の力量を超え、緊張感をもって演奏することで、みな何かを感じたり、特別な体験をしたりすることができるのではないかと考えている。当日は世界各国の音楽を聴くこともできる。和太鼓の演奏と、演奏者としての音楽の祭日への



上：特別展示館での神奈川馬匠の演奏(2014年)
下：講堂での小学生のメンバーを中心とした和太鼓の演奏(2018年)



参加が、子どもたちの成長につながれば嬉しいとの想いもある。また、みんぱくの展示場に今は興味がなくとも、この場所に縁をもち、身近に世界を感じる場所として心に残れば良いなという思惑もあるのだ。昨今、「見える化」ということをよく耳にする。しかし、展示されている物を見ると、その背景に、目に見えない風景や音を感じることができると、簡単に見えることも大事なのだが、見えない物を感じることが大事なのではないかと思う。

民族楽器の楽しみ方

加藤 敬徳
民族楽器演奏家

わたしは五〇年近く民族楽器を収集し、演奏するのを楽しみにしている。音楽の祭日にも琵琶、尺八、パンフルート、オカリナ、フルス、カヌーンなど、毎年のように違った楽器で出演させてもらっている。どんな音楽を演奏するかといえば、ひとつ目はそ



エントランスホールでトルコのカヌーンを演奏(2016年)

の楽器を作った民族が生み出した音楽を演奏することである。ふたつ目は自分の知っている曲や、やりたい曲を弾いて楽しむことである。例えばバッハの曲を尺八で演奏したりする。そして三つ目は自分でその楽器のためのオリジナル曲を作って演奏することである。楽器の個性的な音色により個性的な音楽になるし、また、たとえ間違えても誰にもわからない。

民族楽器には洗練されたものから手作り感が溢れたものまでいろいろある。作り手や作り手の溢れた楽器を見ると、自分でも作ってみようという気になる。最近は民族楽器のキットも販売されている。わたしもインドで見たギターが忘れられず、中古ギターを買ってきて共鳴弦つきのギターを作ってみたり、琵琶風に改造してみたりしている。オーストラリアのディジリドゥなどはパイプや竹を使えば簡単にできる。また安い中古楽器に手を加え、オリジナル楽器を作るのも楽しいものである。わたしは、ネットで三味線を手に入れ、「二味線」というのも作った。

楽器は海外旅行で買ったものもよいが、今はネットで検索したら比較的簡単に売っている店が見つかるし、ネットショップも多い。もし先生について習おうと



右：ギターに琵琶風の高いフレットをつけた「ピター」。撥(ばち)で弾く
中：セミオリジナル楽器の「三味線」。三味線の棹(さお)を短くし、破れた革を紙で補強してある
左：三線キットのネックを琵琶風にし、高いフレットをつけて作った「琉球琵琶」

思うのなら、楽器を買う前に先生を探して相談した方がよいだろう。ネットオークションならば、めずらしい楽器が安く手に入ることもあるが、これは当たり前は、注意が必要である。特に中古の楽器を買う場合は、ある程度自分で修理できないと困ることがある。

そうして楽器を手に入れたら、一人で楽しむのもよいが、仲間とバンドを組んで演奏するのも楽しい。西洋楽器を中心としたバンドに入るのも面白いが、和楽器バンドのように民族楽器ばかりであれば目立つこと請け合いです。それぞれ自分のやり方で楽しむべよと思う。

みんなばくの「動態展示」

— 民族音楽としてのロックンロール

柳本多津之
THE ENGINES

特集 音楽の祭日

日本の音楽シーン、とりわけJ-Popや歌謡曲において、民族音楽の影響が少なくない。しかし、演歌の四七抜き五音階を含め、朝鮮半島やユーラシア大陸、果ては西アフリカの音楽に影響されている



エントランスホールでの演奏。お客さんもノリノリだった(2018年)

ことはあまり語られてはいない。歌謡曲でいうなら、具体的にはギニアのオルケストル・デ・ラ・パイロテの「ラ・ギネ モソロ」のイントロと、昭和五四年の歌謡曲「別れても好きな人」のサビの旋律の類似などがあるが、このこともあまり知られていない。例外は故中村とうようの「大衆音楽の真実」(スープレコード、一九八六年)に連なる一連の仕事だが、一般的に認知はまだまだだ。

ところが、みんなばくの音楽展示は世界各地の音楽を並列することによって、アジアとその先の大陸、そしてもっと広い地域からの影響を「展示」という形で広く訴えかけている。

河内音頭や大分の「流し」はつちゃんぶんちゃん、の演歌、博多めんたいロック「サンハウス」のアルバム、木村充揮のギター。これらの展示は、それらが朝鮮半島やユーラシア大陸の音楽、アメリカ大陸のゴスペル、ブルース等が「越境」し混濁することで成立してきたことを雄弁に示している。

音楽の祭日出演のため、みんなばくを訪ねたとき、この視点に深く共鳴した。エンジンスの目指す音楽と同じ匂いを感じた。一般的に言われている「民族音楽」ではなく、日々の暮らしと地続きでつながっ



特別展示館でのライブパフォーマンス(2019年)

ている鼻歌のような音楽、酒やたばこ、汗や土の匂いのする「体臭」音楽に。

ただエンジンスはそれを、実際に「演奏」という形で表現している。それはみんなばくの「動態展示」ではないかと自負している。曲の旋律やビートを体で感じる演奏は、別の解釈を生む契機になる。例えばベトナムのストリートミュージシャン、アニ・サン、の「トッテンソング」をカバーしているが、歌詞は原曲からの翻訳ではなく、オリジナルなものに変えている。翻案を超え、誤読ともいえるこの行為は、カバーだけにとどまらず、あらたな意味を生成させているのかもしれない。みんなばくは音楽の祭日をおして、博物館の従来の姿である「展示」を超え、雑多で豊潤な文化を「発信」していく場所に変わりつつあるのではないだろうか。

生きた展示としての音楽の祭日

— ネパールのサーランギ演奏とみんなばくの資料

片山美貴 伊藤香里
パンチャ・パリワール

パンチャ・パリワールは、ボランティアなどでネパールに滞在したときにサーランギ奏者パトラ・ネパリ師に師事した日本人メンパーで構成されており、サーランギやマールガルを含めたネパールの民族楽器や民族音楽に深い愛着をもって演奏活動を楽しんでいる。みんなばくの音楽の祭日には二〇〇七年から参加しており、おもに日本に帰国しているメンパーにより楽器演奏の他にもダンスとのコラボ、多様な民族衣装の解説なども交えながらネパールの音楽と文化を紹介してきた。

じつはネパール滞時にサーランギについて調べていたとき、みんなばくの音楽の祭日のことを知り、博物館でのサーランギの展示にも興味をもったのだが、帰国してみんなばくを訪れるとサーランギの展示はなく、収蔵資料の閲覧には事前申し込みが必要など、一般入館者が気楽に見るにはハードルが高いと感じた。しかし、音楽の祭日では、展示していない楽器でも、演奏者ももち込めば、訪れた人びとに生の音を聴いてもらうことができる。わたしたちの演奏が生きた展示になりえることに大きな意義を感じた。



ネパールの弦楽器サーランギ(右)と太鼓のマーダ(左)
(撮影:南真木人、2019年)



サーランギ、マーダ、タブラー、ティンジャなどのネパール楽器を使った演奏
(撮影:南真木人、2011年)

た。みんなばくのビデオテークには一九八二年に撮影されたネパールのサーランギの記録「ガイネーヒマラヤの吟遊詩人」(番組番号二五五)があるが、その元の映像資料や報告書なども閲覧することができ、約三〇年前にパトラ・ネパリ師をはじめ多くのサーランギ奏者がみんなばくの研究者により調査され

た。これを機に二〇〇九年の音楽の祭日では、『東西音楽交流学術調査報告書Ⅲ—ネパール民族音楽学術調査報告書』(藤井知昭編、国立民族学博物館、一九八四年)に採譜されていた曲から「クリシユナ」を演奏した。報告書に記されたシンプルな譜面をわたしたちが演奏するにあたり音程の修正、繰り返しや装飾を追加するという試行錯誤のなかでの発表だったが、このような試みができるのもみんなばくの音楽の祭日ならではのところ。

音楽の祭日での演奏により楽器や民族音楽の名前と存在を人びとに知ってもらい、またみんなばくに蓄積されている学術資料と人びとを繋ぐ橋渡しが少しでもできていれば光栄である。

みんぱくと音楽

福岡 正太
民博 人類文明誌研究部

特集 音楽の祭典

音楽展示

みんぱくは、一九七七年に開館して以来、音楽をテーマとした通文化展示をおこなっている。その音楽展示は、二〇一〇年に全面的にリニューアルした。太鼓、ゴング、チャルメラ、ギターの四種の楽器を取り上げ、四つの異なる視点から人間にとっての音



ギターは、音楽を通じた世界のつながりと、同じ楽器から多様な音楽を生み出す人間の創造性を示している(2021年)

楽の重要性を示す努力をしている。

人の体を震わせる太鼓の音は、音楽のリズムの原動力となると同時に、人間の祈りや強い主張を届ける手段としても使われる。金属を素材とし、長い余韻をもつゴングは、精霊と交信する儀礼で鳴らされ、また権力を示すものとしても用いられてきた。チャルメラは耳をつんざくような鋭い音の特徴とし、儀礼、軍楽、スポーツ、武道、演劇など、幅広い人間の活動を支え、鼓舞するように奏でられてきた。大航海時代以降、全世界へと広がったギターの多様性は、人類の交流の歴史のなかで相互のつながりをもちつつ、特色ある音楽が世界各地で生み出されてきたことを示している。

わたしたちは展示にそなえて、世界各地で収集と映像取材をおこなった。そして、可能な限り楽器と写真、ビデオ映像を一組として展示を構成した。その楽器を演奏する人びとが、どのような思いを込めて、どんな音を奏でるのか、資料と映像の組み合わせから理解していただきたいと考えている。来館者の皆さんから、展示された楽器を鳴らしてみたいという要望がよく寄せられる。確かに楽器に触れて音を出すことができれば楽しいだろうが、目の前にある楽器をじっくりと見て想像力を働かせたうえで、ビデオで実際の演奏を見て音を確かめてほしいとい

うのがわたしたちの希望だ。それは資料の消耗をおさえることにもつながる。

音楽の祭日

一方で、多くの人が、展示された楽器を見て、音を出してみたいと思うのは、こうした衝動が音楽を生み出す根源にあることを示している。展示では、そうした要望にこたえることは難しいが、音楽の祭日は、「音楽を奏でたい」という欲求を受け止めるイベントだと考えることができる。

展示だけで楽器や音楽のすべての側面を示すこと

は難しい。「無形の文化遺産」としての音楽は、実際に同じ空間で聴いたり、自分で奏でてみたりすることではか実感できない部分もある。音楽の祭日は、展示とは異なる角度から音楽を楽しむことができる貴重な機会である。

わたしたちは、展示に加えて、研究公演の開催や映像番組の制作など、さまざまなチャンネルを通じて、音楽を多面的に理解してもらえよう工夫している。音楽展示はこの三月に、高い壁を取り払うなど、一部の手直しをおこない、装いもあらたになった。また、音楽の祭日は、「コロナ禍の状況を注視しながら、オンラインでの開催を計画している(二頁参照)。皆さんには、ぜひ、みんぱくの展示やイベントを通じて、世界の音楽を多面的に理解し、楽しんでいただきたい。



講堂での演奏。タイの合奏音楽ピー・パートを披露したウォンドントリー・タイの皆さん(2018年)



特別展示館での演奏。ブラジルのピリンバウを披露したCapoeira Berimbau Orquestraの皆さん(2019年)



エントランスホールでの演奏。インドネシアのガムランの演奏と舞踊を披露したダルマ・ブダヤの皆さん(2019年)

「音楽の祭典」のはじまり

その 園田 直子 民博 人類基礎理論研究部

一九八二年、「音楽の祭典 Fête de la Musique」は、とても自由な雰囲気ではじまった。

フランスの夏の夜は長い。夜二時を過ぎても、人々はカフェに集ったり、そぞろ歩きをしたりしている。だれもが何となくワクワクし、何か楽しいことをしたい気分になる季節。そのようななか、六月二日、夏至の日を「音楽の祭典」にするというニュースは、すぐにフランス中に広まった。プロの演奏家にかぎらず、だれもが参加できる。音楽のジャンルも問わない。一晩中、街中が音楽であふれるという。

企画の発端は、フランス人の文化活動に関する調査結果だったらしい。フランス人の三七パーセントが何か楽器をもち、一〇人に一人は(若者にいたっては二人に一人が)定期的に演奏しているというのである。

一九八二年の「音楽の祭典」は大成功であった。パリでは、広場、街頭、歩行者天国の道、セーヌ川にかかる橋の上、あらゆるところに人々がくり出していた。演奏をしようとする人々はもとより、それ以上に大勢の人々が心待ちにしていたこの日、みな音楽を聴くために外に出て、音楽を楽しんだ。

あれから約四〇年。プロの演奏もあったが、ほんとうに普通の人たちが自由に、自然発生的に外に出て、参加していた「音楽の祭典」は、今ほどのようになっているのだろうか。

(本館ホームページ、「音楽の祭日 2004」の「ニコラム」を改題、一部修正のうえ再録)



ゴア調査旅行の思い出

小谷 訓子

大阪芸術大学准教授



ゴアのボム・ジェズ教会前に立つ諏訪氏と筆者
(写真はすべて2006年撮影)

はじめてインドを訪ねてみました

ルネサンス美術史を専門とする女性研究者がインドを訪ねた。布教美術を研究テーマに据えると、インドや東南アジア諸国へと足を運ぶ機会にも恵まれる。2006年当時、不安を抱きつつ訪れたインドの街は、新しい価値観との出会いにあふれる場所だった。

ワーク・ライフ・バランスの葛藤

わたしの専門領域は、ルネサンス美術史である。ただ、この原稿を書いている二〇二二年三月のわたしは、昨年から続く新型コロナウイルス感染症のパンデミックで巣籠もり生活中である。おまけに、現在小学生になる娘二人の子育て中でもある。もう一〇年近くワーク・ライフ・バランスを上手く実践しようと喘ぎながら、勤務先の授業を捌き、出産、育児、お受験をなんとか乗り越えて、登坂車線を走っているような女研究者、というのがわたしの実態である。幸いなことに、二〇一四年から民博の齋藤晃さんの共同研究に交えて頂き、昨年は『宣教と適応』(名古屋大学出版会、二〇二〇年)の第八章として拙論を出版することができた。何故この研究出版に、子育て優先で細々と研究しているわたしが参加できたのかといえば、それは出産以前にがむしゃらに研究していたときの貯金があったからだと思っている。



地元のタクシー運転手おすすめの高台から眺めた旧ゴア

じつはわたしは、ハリウッド映画「インディ・ジョーンズ」の主人公インディアナとその父ヘンリーの所属先ということで、より有名になったプリンストン大学の芸術および考古学科で博士号を取得し、ハーヴァード大学のルネサンス研究所で研究員をしていたこともある。あのインディと同じ学科であれば、研究調査はさぞかし面白いフィールドワークなのであろうと想像されるかもしれないが、わたしの研究の主作業は、図書館で研究本を

読むことである。実物の作品を見るために足も使うが、ほとんどが美術館か教会に所蔵されているので、フィールドワークといってもヨーロッパの美術館や教会堂などを訪れる地味なもので、インディのような冒険的なものではない。ただ、博士論文を執筆していたときは、イエズス会の布教美術がテーマだったので、調査のためゴア(インド)やマカオ(中国)、マラッカ(マレーシア)などを訪れた。今回はそのときの話をさせて頂く。

二〇〇六年当時のインド西海岸

二〇〇六年のことである。当時新婚だったわたしは、ゴアに夫がついてきてくれるだろうと期待していた。先進国ならいそいそと二人で調査旅行に出かけていたが、インドには友人もいないし、流石に女二人で不安だったからだ。しかし、夫は仕事の都合がつかず同行できなくなってしまった。現地ではボデイ・ガードを雇うか?などと悩んでいたら、プリンストン大学の友人諏訪理氏が手を挙げてくれた。諏訪氏は専門が地球科学で、南極や発展途上国によく旅行するバック・パッカーだったので、彼が同行してくれることとなり百人力の思いだった。

旅行準備としてA型肝炎や狂犬病などの予防接種を受け、いざインドへと向かい、ムンバイ経由でゴアに到着した。ゴアには一週間ほど滞在し、ボム・

ジェズ教会やセー大聖堂など旧ゴアの要所を回った。驚いたのは、ヨーロッパやアメリカなら確実



セー大聖堂の主祭壇

ありがとうマコト

現地では、司祭や責任者の方々に比較的簡単にお会いすることができ、調査にはとても親切に協力して頂いた。これもひとえに、この旅行を可能にしてくれた諏訪氏のおかげである。ところがゴア最終日にまさかの出来事が起きてしまう。「僕は胃が強いので大丈夫ですが、訓子さんはインドでは、完全に火がとおつていないものは食べない方が良いでしょう」と教えてくれた彼の方が、朝食の半熟卵にあたって食中毒になってしまったのだ。ただ、並外れた体力と回復力のおかげで、二、三回の嘔吐を済ますと、彼はすっかり元気



になり、無事旅路を続けることができたのは幸いであった。そんな諏訪氏もその後JICAの青年海外協力隊に参加し、素晴らしい女性と出会い、今では二児のパパになってワシントンD.C.の世界銀行で活躍している。マコッチ、あのときは本当にありがとう。そしてもうそろそろあのころのようにがむしゃらに研究したいなあ、とゴア調査旅行を思い出す今日このごろである。



ゴアのビーチ

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

研究公演

「伝承する人びと」

北インド古典音楽の世界

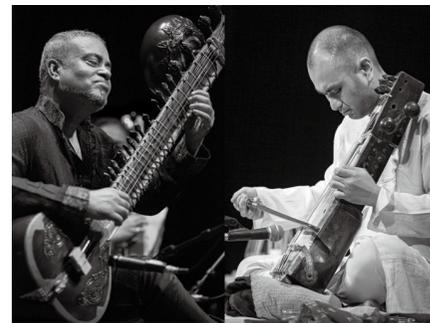
北インド古典音楽は、即興的な要素をもちながらも、旋法やリズムの法則に基づき、師匠から継承した技法やその表現が大変重要と考えられています。本公演では演奏と語りを通して、現代の北インド古典音楽の伝承や師弟制度について紹介します。

日時 6月26日(土)13時30分～15時50分
(13時開場)
会場 本館講堂(定員160名)
オンライン(ライブ配信あり)
(定員300名)

演奏者 アミット・ロイ(シタール奏者)
クル・ブーシヤン・バルガヴァ
(タブラ奏者)
ナカガワユウジ
(サールンギー奏者)
グレン・ニービス(タブラ奏者)

解説 岡田恵美(本館准教授)

【申込期間】
■一般受付
6月18日(金)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。



左:アミット・ロイ
右:ナカガワユウジ
(撮影:井上明)

みんなく映画会第50回みんなくワールドシネマ

「はじまりの旅」

日時 7月10日(土)13時30分～16時30分
(13時開場)
会場 本館講堂(定員160名)
解説 深海菊絵(本館外来研究員)
司会 菅瀬晶子(本館准教授)

【申込期間】
■友の会維持会員・正会員(電話先行受付)
6月2日(水)～6月8日(火)
■一般受付
6月9日(水)～7月2日(金)
※会場のみでの開催となり、オンラインライブ配信はございません。

研究公演と映画会の参加について

・要事前申込、先着順、参加無料
(会場参加の方は要展示観覧券)
・本人を含む2名まで(会場参加のみ)
・会場参加の方には入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。

【申込方法】
■友の会(維持会員・正会員)電話先行予約(定員30名)
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話06-6877-8893
(9時～17時、土日祝を除く)
※先行予約は会場での参加が対象です。

■一般受付
・オンライン予約
みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・メール・電話予約(会場参加のみ)
【申込先】
千里文化財団イベント予約受付
メール yoku@event@minpaku.ac.jp
電話06-6877-8894
(9時～16時、土日祝を除く)

■池谷 和信 編
『フォーラム人間の食1
食の文明論』

農山漁村文化協会 5,940円(税込)
人類にとって食とは何だろうか。現生人類(ホモ・サピエンス)の誕生した約30万年前から現在までの歴史、および日本を中心とした地球という空間のなかで人間の食の普遍性と多様性を追求した1冊。文化人類学を中心として霊長類学、考古学、調理学、栄養学、建築学ほか、学際的に統合するアプローチを試みている。



■ラテンアメリカ文化事典
編集委員会 編
『ラテンアメリカ文化事典』

丸善出版 22,000円(税込)
広大なラテンアメリカに花開く文化に特化して紹介する本邦初の事典。古代文明や植民地史をはじめ、民族、食、宗教、言語、生業、文化遺産、観光、音楽・映画、文学、スポーツ、政治、経済、日本との関係を紹介。



刊行物紹介

■島村一平 著
『ヒップホップ・モンゴリア
—韻がつむぐ人類学』

青土社 2,860円(税込)
ヒップホップと現代モンゴルにおける政治・経済・社会的状況。そしてラッパー個人の経験が複雑に絡み合う緊張関係の中で生み出された世界——ヒップホップ・モンゴリアを描き出したものである。



みんなくセミナー

会場 本館講堂

※参加方法はおよび申込方法は下記をご確認ください。

第510回 6月19日(土)

13時30分～15時(13時開場)

ヒップホップ・モンゴリア

韻がつむぐ現代モンゴル社会

講師 島村一平(本館准教授)

現在、モンゴルではヒップホップが大人気です。ラッパーたちは、貧富の格差や政治の腐敗の現実を踏みながら鋭くえぐり出します。本セミナーでは実際に音楽を聴きながらその文化社会的背景を考察します。

【申込期間】
■一般受付 6月16日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第511回 7月17日(土)

13時30分～15時(13時開場)

人はなぜ共に歌うのか?—インド北東部ナガの伝

統ポリフォニーの事例から

講師 岡田恵美(本館准教授)

インド北東部の山岳民族ナガは、稀少な伝統合唱文化を伝承しています。棚田での農作業では自然と声を重ね、相互扶助の精神が歌の中に息づいています。人はなぜ共に歌うのか、この根源的な問いを取り上げます。



チャケサン・ナガの小学生と一絃琴タイ

【申込期間】

■友の会(維持会員・正会員)電話先行予約
6月14日(月)～6月18日(金)

■一般受付

6月21日(月)～7月14日(水)

ゼミナールの参加方法

①会場での参加(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員300名)
※要事前申込、先着順、参加無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
※本人を含む2名まで(会場参加のみ)
※会場参加の方には入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。

【申込方法】

■友の会(維持会員・正会員)電話先行予約(定員30名)

【申込先】

千里文化財団友の会事務局

電話06-6877-8893

(9時～17時、土日祝を除く)

※先行予約は会場での参加が対象です。

■一般受付

・オンライン予約

みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。

・当日参加申込(会場参加のみ、定員30名)

11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。

友の会

国立民族学博物館友の会(千里文化財団) 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpaku@senri-f.or.jp

友の会講演会

友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順)。受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

友の会講演会の参加方法

①本館第5セミナー室での参加(定員40名)
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員100名)
第513回 6月5日(土)13時30分～14時40分
女神となった疫病—インドの天然痘女神信仰
講師 三尾稔(本館助教)

罹患率も致死率も高い疫病として1970年代まで猛威をふるった天然痘。年輩の方は予防のため種痘を受けた経験があるはず。インドではこの病そのものを女神として信仰してきました。天然痘が絶滅した後もさまざまな病の神として広く信仰を集めています。今回の講演会ではこの病の歴史や北部インドの天然痘女神信仰の事例に基づき、伝染病に対応し、災いを乗り越えようとするインドの人びとの知恵や想像力の特徴を考えます。

※受付フォーム https://www.senri-f.or.jp/513tomo/
第514回 7月3日(土)13時30分～14時40分
河西回廊の石窟寺院と美術
講師 末森薫(本館助教)

インドで誕生した仏教は、陸路、海路で各地に伝播していきました。北伝仏教が伝わった中国北西部の河西回廊沿いには、像や壁画で荘厳された石窟寺院が数多く残されています。本講演では、南北朝時代に開かれた敦煌莫高窟と天水麦積山石窟を中心に、石窟寺院の空間やそれを彩る美術から仏教伝播の諸相を探ります。
※受付フォーム https://www.senri-f.or.jp/514tomo/

みんなく友の会オンラインレクチャー

友の会ホームページでミニレクチャー動画を公開中です。
なぜ古代文明の建物は大きいのか
——南米アンデス文明からの視点
講師 関雄二(本館副館長)

世界の古代文明に共通するのは、巨大な建物、いわゆるモノументを築いたことです。その理由、そして大きくなったことにより、社会がどのように変貌したかについて、南米アンデス文明を例に解説したいと思います。
※公開ページ https://www.senri-f.or.jp/tomomovie004/



世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

日本の竹の造形に 魅了された世界の 人びと

諸山 正則
元東京国立近代美術館主任研究員

バスケットリーの主要な素材である竹。強靱で、反発力に富んだその素材は、日用品から工芸作品まで、さまざまな造形物をつくり出す。日本の竹工芸は国際的な工芸美術の分野でとりわけ注目を集めてきた。その魅力を、収集家の動向とともにさぐってみよう。

きっかけは万国博覧会

幕末のロンドンやパリ、明治期に入ったウィーンやフィラデルフィア等の欧米の主要都市で開催された万国博覧会では、世界に開けた遥か東洋の日本へのエキゾチックな関心が喚起され、そこにある美しさや驚愕のわがが發揮された陶磁器や、金工品、漆工品等の工芸が特に珍重愛好された。竹製品もまた、東洋の自然観を映して、収集家らにコレクション



「花器陳列会 デモンストレーション」。初代田辺竹雲齋(右)と幼少の二代竹雲齋(左)(提供: 田辺竹雲齋、大阪三越、1915年)

ン万博で見いだした日本美術に熱烈な関心を抱き、竹製品を収蔵したという。後に、「籠師(かごし) (竹細工に技巧と創意をあらわした専門職)」の先駆をなした大阪の初代早川尚古齋の制作に特異な創作性と美しさを見いだして、パリやベルリンの美術商を通じ同博物館に貴重なコレクションをつくった。

伝統と革新性の共存

工芸とも深くかわる日本の自然や文化と同様に、日本の工芸に対する世界の関心は、近年にいいよ高まりを見せている。特に、二〇〇七年に大英博物館が企画し開催した「わがの美——伝統工芸の五十年」展が改めて契機となった。記録的な観覧者数の成果があり、さらにその伝統のわがの美の継承とともに連続と今日的な創作と表現が發展されてきたことへの学術的な高い評価があった。そこには、飯塚小珣齋や五世早川尚古齋などの現代を代表する伝統作家の竹工芸作品も陳列された。



四代田辺竹雲齋の作品「インсталレーション——Connection」(東京・日本橋高島屋エントランスホール、2017年)

すなわち、明治から大正期のころの初代および三世早川尚古齋と初代田辺竹雲齋の文人嗜好の伝統の系譜があり、竹の工芸美術の近代化を大成した飯塚珣齋と生野祥雲齋らの系譜へと繋がった。そしてその後継で時代に即した創作の感覚をあらわした現代作家らへと、いうならその伝統が發展してきたことこそが今日の国際的関心が高まる原動力となったと思う。その伝統継承の姿は、幼少期から次代を伴い後継を育成してきた大阪の田辺竹雲齋家に代表されるであろう。明治期後半に時代の寵児となった初代田辺竹雲齋は繊細で優美な創作に個性を重んじた表現を獲得して近代化の端緒を拓き、二代は工芸美術にわざと気品ある表現世界を拡張した。三代は戦後の激動した現代美術に接近して立体造形としての可能性を押し広げ、そして平成から令和の時代を担う四代竹雲齋は、まさに「コネクション(つながり)」を制作のポリシーとして、洗練された竹雲齋家の伝統のわざと革新性を自己の本領としつつ、国内外各地で精力的に活動して評価をいよいよ高めている。

コレクターを魅了する現代的な造形美

ロサンゼルスやロイド・コッツェンは、世界的な竹工芸収集の熱を起こした直接の祖であろう。一九五〇年代から半世紀をかけて優に一〇〇〇点を超える驚異的なコレクションを形成したが、その歴史的発展や伝統的な美意識よりも、自身の直観にもとづく作家の創作性と造形そのものへの関心か

らそれを成し遂げた。幾度も来日し、当時および現代の作家らと交流を深めた。厳選されたコレクションによる大型の作品集を刊行し、ニューヨークをはじめアメリカ各地、そして日本各地を展覧会巡回させて成功を取めた。コレクションのすべてはサンフランシスコのアジア美術館に寄贈されているが、こうした活動が欧米の収集家たちを大いに刺激した。

ニューヨークのアービー夫妻は、コッツェン・コレクションに魅了され、現代絵画と同様に日本の竹の造形に自由な創作を見いだし直観と美的思考とで収集をし、作家を支援してきた。厳選されたコレクションは二〇一七〜一八八年にメトロポリタン美術館で展示公開され、絶大な観覧者数と評価を得て、昨春に同館に約八〇点が収蔵された。

コッツェンやアービー夫妻らの竹工芸に対する感動は、床の間の花籠鑑賞や機能美でなく、何よりも現代の造形芸術としてのすばらしさという認識を示している。理解した。同様の



上: 「わがの美——伝統工芸の五十年」展陳列(大英博物館、2007年)
下: 「日本の竹工芸展」の歴代竹雲齋コーナー(メトロポリタン美術館、2017年)

感動を熱く語ったパリのケ・ブランリ美術館のステファン・マーティン館長は、二〇一八年にヨーロッパで初の大々的な竹工芸展を企画・開催し、主要作品を収蔵したと聞いた。竹は日本の自然文化を精神的に象徴するものであり、竹の工芸美術は、素材の特質による明快な美しさで成形手法や、伸びやかで強靱な造形性があった、いうなら世界の人びとの理解が得やすいものであった。何よりも、長い歴史文化を連続と継承し發展させてきた日本そのものに対する関心が増すなか、日用品であれ美術品であれ、入手して愛でられる竹工芸品はいよいよ喜ばれていくだろう。

はら ひょうたんで悪鬼を祓う？

民博 グローバル現象研究部 チエ ソヒ 諸 昭喜



脱穀・風選用 箕(韓国、H0018273)

症状によつては患者の髪のもも加えて、庭や門の外に置いた。そして包丁をそれに向かって投げつけ、「食べたら出

くう道具になる。しかし、ひょうたんで脱穀・風選用の箕と組み合わせた場合には、韓国ではまったく異なる意味となる。今はなくなった風習だが、男の子が夜におねしょをすると、箕を頭にかぶり、ひょうたんをもって村中から塩を集めてまわった。村人は男の子がかぶっている箕を棒でたたいたり、塩をあげつつもからかったりする。箕とひょうたんの組み合わせは、おねしょをなおすための、一種のしつけの道具であった。

一方、調理用包丁との組み合わせでは、ひょうたんは呪術的治療の道具にもなる。近代医学が普及していなかった時代に、原因不明の痛みがあったり、病気がなかなか治らない、また葬式に参列してからの調子が良くないというような場合には、悪鬼の仕業だと認識された。こんなとき、地域による差はあるが、女性がひょうたんに飯を三さじ、少量の味噌と塩を入れ、また、

朝鮮半島の文化展示 「食の文化」セクション



水汲み椀(韓国、H0085483ほか)

朝鮮半島の文化展示 「精神世界」セクション



巫具(韓国、H0214601ほか)

朝鮮半島の文化展示 「住の文化」セクション



右端が包丁(韓国、H0214957ほか)
(この資料が展示されている「酒幕」は、現在閉鎖中)

ていけ」と叫ぶ。このとき包丁の先が門の外側に向けば悪鬼が去り、家側に向けばまだ残っているとされる。その後、ひょうたんを燃やすことで患者の病気が治ると考えられた。ここでのひょうたんは民間療法の道具である。

置く場所による意味の変化

巫俗儀礼の場では、ひょうたんは音を利用した呪術的道具になる。ひょうたんの内側を強く揺いたときに出る音は悪鬼を祓うとされている。また、空のひょうたんを家の門の前に伏せて置けば、帰宅した家族や来客に対して、それを強く踏み潰すという悪意を祓ってから家に入るようにという意味になる。調査によれば、臨月をむかえた女性のいる家族は葬式や病気の見舞いに行かないのが通例であった。しかし、臨月前の妊婦がいる家で家族にそのような機会がある場合には、家に入る前に塩をまき、ひょうたんを強く踏み潰すことで悪鬼を祓う習慣があった。

ひょうたんをどこに置くかという問題に加えて、なかに何を入れるかによっても意味が変化する。米を詰め、白い紙で包んだひょうたんを神棚に置かれていたら、それはサン神のひょうたんである可能性が高い。韓国でのサン神は、祈子(子宝祈願)、産前

みんなく回遊の朝鮮半島の文化展示場には、ひょうたんで作られた三つの「水汲み椀(バガジ)」がある。アフリカが原産地として知られているウリ科のヒョウタン種は、全世界で昔から栽培されているので、ひょうたんを活用した料理や物は各地で見られる。みんなくの「標本資料目録データベース」で検索してみると、世界各地で使われているひょうたんを展示しないものも含めて一目で見ることが出来る。食器、楽器、飾りなどいろいろな形のひょうたんが世界各地域からおよそ五〇〇点も収蔵されていることをみても、ひょうたんは人間の歴史となり深いものなのだろう。

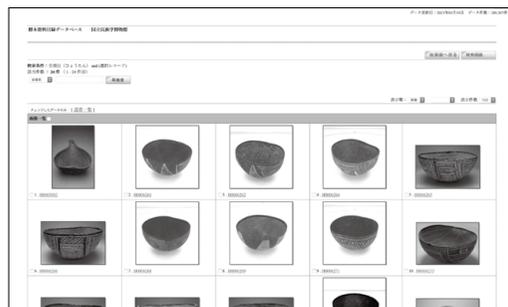
博物館としては標本名で分類しなければならぬという側面はあるが、日常生活で使われる道具はひとつのカテゴリーに当てはまらない場合も多い。冒頭で紹介したひょうたんはその標本名からもわかるように、手桶や椀として使われたものだが、ひょうたん製の器は、韓国では呪術、民間療法の道具としても使われていた。今回は韓国のひょうたんにまつわる風習を事例として、展示されたものの多義性を探ってみよう。

ものとの組み合わせによる意味の変化

朝鮮半島の文化展示で見られるように、大型の桶とひょうたんは一般的な組み合わせで、この場合のひょうたんは水や米をす

ぶんべん
分娩、産後と出生の全過程にかわり、子どもの成長を見守ってくれる神である。家庭ではひょうたん、つぼ、または綿の袋のなかに米を入れて、神棚に置き、サン神に供える。このとき、米を入れたひょうたんはサン神が宿る「神体」と認識され、子どもが一〇歳になるまで大切に祀られる。

韓国では「耳にかければ耳飾り、鼻にかければ鼻輪」ということわざがある。それによって解釈が異なるということの意味する。モノには使う人や状況によって多様な意味が付与される。文化に裏付けられたモノの多様な活用を考えながら展示を閲覧することもひとつの楽しみ方である。



みんなくホームページの「標本資料目録データベース」から見られる世界のひょうたん



里帰りと里離れ

へんせいおん
迎清音
民博 外来研究員

新型コロナウイルス感染症の影響により、日本では年末年始の帰省自粛が、中国では「今いる場所で旧正月を」というメッセージが、政府によって国民によりかけられた。まして海外からの帰省となればなおさらだ。ここでは移民の望郷の念に思いをこめて、「八両金」という映画を紹介する。これは一九八〇年代の経済的に遅れた中国の村に里帰りした海外移民の恋愛物語である。

移民の時代に翻弄される恋

主人公であるサインアン（細矢、瘦せて小さいという意のあだ名）は中国の文化大革命（一九六六〜一九七六年）のなか、むかしから多くの移民を海外に送り出してきた中国広東省台山の村からニューヨークへ密航した。



上：中国と西洋の建築様式が融合した碉楼
下：帰国移民の家屋

モアに富むサインアンに次第に恋心をいだくようになる。しかし、サインアンは自分の将来が安泰であると約束できないと思い、告白しなかった。ジェニーもいつアメリカに戻るかも定かでないサインアンとではなく、家族の期待に背かず、頼りになる婚約者とアメリカへ行くことを決める。物語の最後に、

サインアンは八両金を龍と鳳凰の模様が彫刻されたネックレスに作り直してもらい、結婚祝いとしてジェニーに贈って、彼女が乗った船を見送った。

故郷に錦を飾る

この恋愛物語はフィクションだが、村の風景、宴会や見合いの場面は、中国系移民と故郷との複雑な関係を映し出している。二〇世紀前半、海外へ働きに出た台山出身者は、送金することで故郷に残った家族に豊かな生活をもたらした。そして、家族へ送った財産を匪賊から守るために、防御を兼ねた望楼である碉楼を村に建てた。サインアンも一棟の碉楼を見た隣間、故郷についてと気づき、小さいころ碉楼で匪賊と戦った記憶を一緒に村に帰る途中、ジェニーに語る。

中国では、文化大革命により移民の送金と里帰りは一時止んでいたが、一九八〇年代になると徐々に再開されるようになった。帰省する移民の多くは村人たちをもてなす宴会を開いた。本映画においても、サインアンの両親は誇らしげに宴会を開いた。その際、金の腕時計とネックレスを借りて見栄を張ったサインアンは、自分が苦勞して稼いだ米ドルを、おめでたいことをあらわす赤い紙で包んで仕方なく村人に配った。

村人の夢

村人は故郷に錦を飾る移民を羨ましく思い、

海外へ行く夢をいだくようになった。当時はまだ女性が出稼ぎに出ることは少なかったため、移住した男性は故郷に戻って結婚相手を探すことが多かった。そこで、娘を海外へ嫁がせることは、移民への道の足がかりとなった。映画のなかでも、そうした婚姻を期待する村人の様子が流行り文句であらわされている。「儲けていないとだめだ、少しお金のある人は顔立ち次第。香港人なら良い縁談、金山阿伯は誰もが望む花婿だ」。

「金山阿伯」は、もともとサンフランシスコなどの金山へ働きに出た中国系の男性を指したが、後に出世した男性移民一般を指す呼称となった。映画では、金山阿伯だと思われたサインアンは、村の娘数人と見合いをした。ジェニーの婚約者は名実ともに金山阿伯であったため、彼女の結婚は移民するのが夢の時代においては取りやめることができなかった。

移民母村の変容

本映画が描く一九八〇年代以降、中国の高度経済成長は誰の目にも明らかだ。わたしが二〇一一年に台山でフィールドワークをおこなった際、村人は海外に移住した家族の送金で家屋を修繕し、村の公共施設までも整備していたが、全面的に送金に依存する状況ではもはやなかった。また、里帰りの移民による村人たちへの宴会は見られず、村の若い女性たちも海外へ嫁ぐよりも、中国国内の大都市で働くことを選ぶようになっていた。移民と故郷に残る家族、故郷の人びとの相互関係は、それぞれの時代で変わってきたのである。



移民の送金により整備される移民母村
(掲載写真はすべて2011年に撮影)

「8テールのゴールド」

原題：八両金

1989年／香港／広東語／105分

監督：メイベル・チャン

出演：サモ・ハン、シルヴィア・チャンほか

日本での公開なし

ことばの迷い道

信頼してはいないけれど

ちや ともゆき
茶谷 智之

人間文化研究機構
総合人間文化研究推進センター研究員

わたしたちは自分自身では解決できない困難に直面したとき、他人に頼る。そのとき頼る相手は誰でもよいわけではない。信頼できる相手を探そうとする。それはなかば当たり前のことだと思っていた。インドの首都デリーのスラムに暮らす人びとも、何か困ったことがあれば他人に頼る。例えば、スラム周辺では犯罪が多く、子どもだけを家に残して市場に買い物に行くことができない。そうしたときは、子どもが路地で遊んでいて危ないことをしないかなど、同じ路地の隣人に見てもらうように頼む。

異なる宗教やカースト、出身地の人びとが暮らすスラムのなかであっても、同じ路地に暮らす隣人のことは信頼しているのだ。その様子を観察していたわたしはそう思っていた。しかし、スラムの友人女性にヒンディー語で「同じ路地の隣人をウイシユワース（信頼）しているのですね」と尋ねると、驚いたことに「違う」とはつきり否定されたのである。そして彼女は隣人を信頼していない理由を詳しく説明してくれた。

「いつも話している仕立屋の男性は不倫をしていて、ときには隣人の女性に卑猥なことをかけてくる。わたしも同様の被害に遭い、それを知った夫とその男性は殴り合いの喧嘩になった。またシングルマザーの女性はお金に困っている様子がない。それは中間層の人と性行為をすることでお金を稼いでいるからだ」と噂されている。隣家の

主婦はよい人だが、その夫は暴力をふるう。だから同じ路地の隣人は誰も信頼していない」と言う。隣人に子どもを見てもらいながら「信頼していない」と言い切る彼女を不思議に思っていたわたしに対し、彼女は隣人のことは「パロージャー」している」と説明を付け加えた。しかし、その説明はわたしを余計に混乱させた。「パロージャー」も、これまた「信頼」という意味をもつ単語だからだ。

どうやらスラムの人びとは隣人を信頼しているか否かは別として、少なくともあてにはしているようだ。その相手は、信頼できないさまざまな理由をもつ隣人のこともあれば、お金を払うと選挙カードなどの公的証明書を作ってくれる身元の不明なブローカーなどのこともある。スラムに暮らしていると、一人ではどうしようもできないことがよくある。そうしたとき、何か状況がよくなることを期待しながらその場にいる誰かに頼っている。「パロージャーしている」という彼女のことはには、「期待している」や「当てにしている」といったニュアンスが含まれているのであった。

「信頼」という同じ意味を含むふたつのヒンディー語のことは、それらがもつ細かな意味の違いは、完全には信頼していなくても、あてにできる誰かとながって生きるスラムの人びとのあいだで、大きな違いとなつてあらわれているのであった。

編集後記

例年、夏至前後の日曜日に開催している「音楽の祭日 in みんなぱく」は、一日の入館者数が6636人（2019年）に上るほど親しまれ、民博のひとつの顔になっている。わたしも何度か見てきたが、出演者が奏でる楽器と音楽の多様性が「in みんなぱく」ならではの魅力だろう。本号では、この6月の好評イベント「音楽の祭日」を特集としてお届けする。まだ見たことのない読者のために付言すると、その日は28組の出演者による、それぞれ20～25分のライブ演奏が、特別展示館とエントランスホールの2会場で催される（2019年の場合）。本特集では、これまで数多く出演してくれている4組5人に寄稿をお願いした。いずれも地球上各地の音楽に親しみ、演奏してきた強者で、自らの演奏を民博の「動態展示」だとまで言ってくれる方もいて有り難い。残念ながら、新型コロナの影響で今年の音楽の祭日は中止となり、今年はオンライン開催が予定されている（詳細は本誌12頁）。また一堂に会して、さまざまな音楽にどっぷり浸る一日がくることを切に願う。

本号をもって、わたしは編集長の任を終えることになる。7月号からは三島禎子編集長の元、表紙や誌面デザインも刷新される。どうぞご期待ください。（南真木人）

●表紙：「音楽の祭日 in みんなぱく」、特別展示館での演奏。アフリカの音楽と舞踏を披露するYéréYa African dance & percussionの皆さん（2019年）

次号の予告

特集

「民話のちから」（仮）

みんなぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんなぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。毎月『月刊みんなぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんなぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

ミュージアム会員

『月刊みんなぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんなぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、公益財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00）



月刊みんなぱく 2021年6月号

第45巻第6号通巻第525号 2021年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 南真木人（編集長） 上羽陽子 齋藤晃
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾

題字デザイン 宮谷一款
コーナーデザイン

長岡綾子 宮谷一款

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんなぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんなぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんなぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

